余剰からうみだされる造形物
――手芸について考える

上羽陽子（うえば ようこ）　民博 文化資源研究センター

わたしたちは、さまざまな造形物をみたときに、直感的に「なにか」を感じとって、「手芸品」、あるいは「手芸っぽい」と判断していないだろうか。では、その「なにか」とはいったいどういったものなのであろうか。

自らの花嫁衣装に刺繍をほどこすラバーリー女性。ラバーリー独特の意匠をみることができる

手芸とはなにか

手芸ということばから、あなたはなにを想像するだろうか。編み物や刺繍（ししゅう）、ビーズ細工などを思い浮かべるかもしれない。あるいは、母親がつくった人形や置物などの室内装飾品を思い起こした人もいるだろう。

日本における手芸は、「女性による家庭内での、市場に流通しない趣味的な制作」という意味で、明治期につくられた概念である。また、手芸とは、手先の技術およびそれによる制作をさし、主として糸、布を用いてつくることの総称ともされている。そのため、現在でも手芸のつくり手の多くは、女性である。そして、趣味的な制作物であるため、近親者への贈り物として授受されることも多く、ときにはすぐに捨てられてしまうこともある。

手芸を芸術、美術、工芸と比較した場合、つくり手が女性ということ、素人がつくったものということから、少なからずネガティブなイメージがあることも明らかである。

手芸的な造形活動

では、日本以外の国に手芸的な造形活動はあるのだろうか。筆者は手仕事が息づいている村落を調査で訪れることが多いが、ときに明らかにその土地に根ざしていない、手づくりの人形や置物をみてガッカリすることもある。また、お土産として、そういったものをもらったとき、使うことも飾ることもできずに、もてあましてしまった経験もじつはある。

このような造形物はどのような経緯からうみだされるのであろうか。

ひとつは、近代化によって女性が家事労働から解放され、余暇や趣味といった時間をもったとき、それまでおこなっていた針仕事や、手先の仕事による技術を用いて、実用的ではないものがうみだされる可能性が高い。余剰的なものであるがゆえに、洗練された造形力や美的価値がともなっていないものが多くうみだされるのかもしれない。

有用？不要？

わたしが長年調査をおこなっている、インド西部カッチ県で暮らすラバーリーの女性たちも、近年になって盛んに余暇的造形物をつくっている。もともと彼女たちは、刺繍布で自分や家族などの衣装や調度品を制作してきた。貴重な糸や布を大事に使いながら、うみだされる刺繍布や衣装は、風土や民族性に支えられた意匠と技術に基づいており、確固とした造形力や美的センスに支えられている。

これまで女性たちは、家事や育児の合間のわずかな時間をみつけては、これらの手仕事をしてきた。しかし、近年、井戸から水道の蛇口、薪（まき）からガスコンロといったように、生活形態が一変した。さらには、工場製の刺繍レースが市場で安価に入手することができるようになり、手刺繍にかわってそれらを衣装に縫い付けるなど、家事労働だけではなく、手仕事の省力化も進んでいる。

そういったなか、彼女たちは、町でプラスチック製のビーズなどを購入し、余暇的時間に、これまでにはなかった室内装飾品をつくるようになったのである。それらの造形物の特徴は、彼女たちがもっている造形力を十分に発揮したものとはお世辞にも言えず、まさに余剰のうえでの生産物であり、ときには不要品にさえもみえてしまう。それは、翌年、同じ家を再訪したときには、すでに飾っておらず、聞けば、「友人にあげた」「飽きたので捨てた」などと答えることからも明白である。

では、そういったものは、何の役にも立たないのであろうか。手芸だからこそもつことのできる機能もあるはずである。

たとえば、手芸を媒介して形成される場というものがある。高度な技術をもたず、誰でもできることから、趣味を介した人的ネットワークの形成や、癒しや精神安定としての効果があるのではないだろうか。さらに、手芸教室や手芸キット、手芸関連図書が広く一般に普及していることや、素人でも容易に販売することのできる手づくり市やインターネット上での販売方法の広がりなど、その経済効果も無視できない。

このような余剰的・余暇的造形活動をどのようにとらえることができるのであろうか。また、わたしたちが「手芸品」あるいは「手芸っぽい」と判断してしまう特質とは、なんであろうか。

四月から始まったこの新コーナーでは、このような世界の手芸的造形活動の現状と、それらをうみだす社会制度に焦点をあてて事例を紹介する。身近な造形物への見方を再考する機会になればと考えている。

これまでにはなかったプラスチック製ビーズによる飾りや、アクリル毛糸によるレター入れが右側にみえる。翌年には外されていた

東京ドームで開催された第15回東京国際キルトフェスティバルの会場風景。手芸用品の出店がひしめきあっている